

はじめに

本書は大阪市に所在する大坂城跡と大坂城下町跡で、過去六〇年にわたって行なわれてきた発掘調査の成果をまとめた近世都市大坂の歴史を訪ねる案内書である。

大坂城跡は豊臣秀吉が築いた大坂城の範囲で、本丸・二ノ丸・三ノ丸、そして惣構そうがまえで構成されている。

大坂城下町跡も秀吉が建設した最初の城下町が順次拡大していった。築城当初は大坂城の南部と西部に細長く建設されたが、秀吉の権力が増強していくたびに大坂に人びとが集住してきたため町人地が拡張し、秀吉最晩年には大坂城西方の船場地区にも町人地が建設された。

こうして拡大した大坂も慶長二十年（一六一五）の大坂夏の陣によって焦土となったが、徳川幕府の大坂城再築工事や市街地再生事業によってすぐさま復興し、往時の繁栄を取り戻すこととなった。なかでも船場地区の町人地は当初の範囲から西へ南へと拡大した。その一方、幕府直轄地となった大坂は武家地が極端に狭く、大坂城の近くに集められ、その広さは城下町全体の四分の一程度でしかなかった。

本書では城下町のシンボルとなる城郭や武家地だけでなく、秀吉が建設し、その後に拡大していった町人地に眼を向けている。城郭の外側に広がる町人地で行なってきた発掘調査で、そこに住まう人びとの生活を如実に示すさまざまな情報が多数得られているからである。

次に本書で使用する年代観について述べておこう。

大阪は古代の難波宮なにわのみやが都市としての萌芽ともいわれるが、現在の大阪の礎となったのは、やはり豊臣秀吉の大坂城築城であろう。だが、秀吉が築城する以前には、大坂城の地に大坂本願寺ほんがんじと寺内町じないまちがあった。さらに近年の発掘成果によれば本願寺寺内町だけでなく、南には四天王寺門前町、西には中世の港灣都市渡辺津わたえのつが存在していた。秀吉はそれらを城下町に取り込んで城下町を造つたのだ。

以下ではそうした大阪の歴史を鑑み、秀吉の大坂城築城以前の大阪を「中世大阪」と呼称し、大坂城築城開始から大坂夏の陣までを「豊臣期」とし、さらにその間を慶長三年（一五九八）の三ノ丸造成工事や船場地区の町人地建設を画期に「豊臣前期」と「豊臣後期」に区分する。そして大坂夏の陣後に徳川幕府によって復興されて以降を「徳川期」と呼称する。

多くの歴史書では信長や秀吉の時代を安土桃山時代と呼び、慶長八年（一六〇三）に徳川家康が江戸に幕府を開いてからは江戸時代と呼称するが、大坂は豊臣家の城下町として天正十一年（一五八三）から慶長二十年（一六一五）まで豊臣家が支配してきたことで、慶長八年以降も「豊臣期」と呼び、豊臣家滅亡後を「徳川期」と呼んでいる。

大阪歴史博物館

公益財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

大坂 豊臣と徳川の時代 目次

はじめに

序 章 中世の大阪

- 第1節 大阪の成り立ち 8
- 第2節 中世大阪の都市群 14
- 第3節 遺物からみた難波宮廃絶から中世大阪まで 22
- 第4節 大阪と石山 28

第1章 豊臣時代の大坂

- 第1節 豊臣大坂城下町の建設と拡大過程 32
 - 第2節 豊臣大坂城の構造と見つかった石垣 41
 - 第3節 大坂にいた大名と発掘された武家屋敷 48
 - 第4節 天満地域の開発 56
- ❖コラム❖ 移動する町人と広がる街区 63

第Ⅱ章 徳川時代の大阪

- 第1節 城下町の再生と展開 66
- 第2節 発掘された蔵屋敷 74
- 第3節 町人地の拡大と構造 81
- 第4節 大阪をつくった町人たち 88

第Ⅲ章 大阪人のくらしぶり

- 第1節 大阪出土の焼物 94
 - 第2節 大阪出土の桃山陶磁 100
 - 第3節 さまざまな道具たち 108
 - 1 大阪の飲食器 108
 - 2 大阪の台所 113
 - 3 輸入陶磁器 117
 - 4 化粧道具 121
 - 5 明かりと油 125
 - 6 文房具と定規 128
 - 7 貨幣・秤・枴 132
 - 8 遊び 136
 - 9 ミニチュア土製品 140
 - 第4節 食べ物と動物 146
- ❖コラム❖ 文化財をまもり伝える技術 151

第IV章 都市の産業

第1節 産業都市大坂 156

第2節 金属加工業 164

第3節 発掘された多彩な産業 174

1 大坂の瓦生産 174

2 近世大坂の陶器生産 178

3 硯製造業 184

4 墨造り 186

5 骨・角細工 188

第4節 『難波丸』と発掘調査成果の対比 192

エピローグ 近世大坂の拡大と終焉 196

あとがき 199

関連年表 200

参考文献 i

序
章
中世の大坂



「東大寺大仏殿」銘軒丸瓦 拓本



図1 難波津の風景

第1節 大阪のなりたち

❖ なにわ 古代の大阪

大阪は古代には「なにわ」と呼ばれ、「浪速」「浪華(花)」や「難波」などの字があてられた。古代、大阪の地形は西に大阪湾が広がり、東には縄文時代の河内湾の名残の河内湖かわちこと呼ばれる水域が広がり、その間に半島のように南から北に突き出た上町台地があった。人びとはその台地の狭い場所に生活していた。上町台地の北には淀川の河口に形成された三角州がいくつもでき、その間を網の目のように流路が走っていた。その一つ、上町台地のすぐ北にあった流路が「難波なにわの堀江ほりえ」で、その水流が速かったことから浪速と名付けたと言われ、それが転じて浪華(花)や難波が用いられたとされている。

大阪は西日本の水上交通路であった瀬戸内海と当時の王権が所在した畿内中核部との結節点にあたり、早くから水陸交通の要衝となり、古代より東西交流の中継地としての役割を果たしてきた。

早くは縄文時代に、東北地方や関東地方そして九州地方の土器が大阪にもたらされ、弥生時代から古墳時代においても他地域の土器が出土する遺跡が確認されている。

古墳時代においては当時の中央政権の港湾機能も有していた。その証拠とな



図2 四天王寺西門の鳥居

る遺跡が大阪市中央区にある法円坂遺跡である。この場所は飛鳥時代に難波長柄豊碓宮が造営されることになる。五世紀代に床面積が一〇〇平方メートルにもなる正南北を指向した巨大な倉庫が十六棟も建ち並んでいた。巨大な規模と整然と並ぶ姿から、古墳時代に畿内を中心にしていた王権の倉庫群であろうと評価されている。飛鳥時代には日本最初の宮殿である難波長柄豊碓宮が同じ場所に建設され、奈良時代になっても遷都を繰り返す王宮が一時期、この地を都と定め首都となった。この時期の難波は政治史の上で重要な位置にあったのだ。古代の政治都市として繁栄していた大阪ではあるが、奈良時代末に難波宮が廃都となって以降は大宮人の記憶からも消え去り、京から貴顕が参詣する四天王寺や住吉大社といった神社が知られる程度であった。

◆四天王寺門前町

四天王寺は飛鳥時代以来法灯を守ってきた寺院で、それ以降、境内の周囲に門前町が形成され、室町時代の明応八年（二四九九）には「天王寺ハ七千間在所」（『大乗院寺社雜事記』）と記される程の人家があつた。特に四天王寺の西側に広がる町で発掘調査を行なうと、平安時代から室町時代の建物跡が重なり合つて見つかり、長期間にわたって人びとが住んでいたことがわかる。

四天王寺は平安時代末に広まった浄土信仰の中心となり、京の貴顕だけでなく広く庶民の参詣地として信仰を集めていた。そうした参詣者を相手にする商業も四天王寺周辺には多くできていたようで、不定期な市だけではなく、常設